

面会 感染防止で待った

道内の病院や介護施設 制限継続

家族「早く元のように」

新型コロナウイルスの感染防止のため、道内の病院や介護施設では国の緊急事態宣言の解除後も、家族が患者や入所者に面会できない状況が続いている。感染していない患者でも危篤状態になってようやく家族に面会を認める病院は少なくない。「窓越しの面会」など対応を模索する介護施設もあるが、家族は「早く元のように会いたい」と感染収束を心から望んでいる。

(岩崎あんり)

危篤でやっと

「最期をもっと一緒に過ごしたかった」。札幌市の女性(73)は4月下旬、母(97)を老衰で亡くした。

母は6年前、誤嚥性肺炎で市内の病院に入院した。女性は毎日見舞っていたが、2月25日から面会できなくなり、その後は毎日病院に電話し、寝たきりの母の様子を聞いた。母は耳は聞こえるが、話はず、表情で気持ちを伝えるしかない。それでも「顔色は良いですよ」と看護師に言われると、少しほっとした。

3月20日の誕生日も看護師に手紙と菓子を託した。訪ねると、いつもうれしそうだった母。ベッドでじっと自分を待つ姿が浮かび、「行けなくてごめんね」と心の中で何度も謝った。

母の容体が悪化した4月下旬の早朝、病院から「最小限の人数で来て」と連絡を受けた。駆けつけると母は酸素マスクを着け、すでに意識はなかった。「ありがとう」と声をかけ、手をさすり続けた。母の心拍は徐々に弱まり、数時間後、意識が戻らないまま亡くなった。みとることができたのは自分だけ。道北で暮らす弟は間に合わなかった。

「毎日会いたかったし、話し掛けたかった。コロナが憎い」。だが、悔やんでばかりでは母が苦しむ。せめて最期に会えて良かった。女性はこう自分に言い聞かせている。

道内の病院では、感染が拡大した2月下旬ごろから順次、面会制限が進んだ。約180人が入院する動医協札幌西区病院も3月下旬から制限を始め、今も続いている。容体の急変など緊急の場合を除いて家族は病棟に入れない。過去にインフルエンザの流行などで数週間の面会制限があったが、数カ月には及ぶのは初めてだ。



携帯電話を手に、高橋京子さんを窓越しに見つめる高橋さんの母。少し寂しそうな表情が気にかかった

札幌市北区の特別養護老人ホーム「オニオンコート」。高橋京子さん(62)は屋外で乳酸菌飲料を入れたビニール袋を振りながら、窓の向こうの室内にいる母親(97)に携帯電話で話し掛けた。母が入所して6年。2月下旬に家族の面会が中止されるまでは週2、3回訪れていた。ロビーに母娘並んで腰掛け、乳酸菌飲料を飲みつつおしゃべりするの何より楽しかった。

4月下旬、同ホームが窓越しの「面会」を始めた。時間は10分間。1日8組の予約枠が埋まる日もあり、相談員の岡山頼大さん(41)は「互いの姿を見ただけで、涙を流しあう家族もいる」と話す。

重症化しやすい高齢者が大勢入院しているため、島垣雄一事務長は「家族の思いは痛いほど分かるが、全国的に院内感染が相次いでいる。患者の命を守るためだと理解してもらえないかな」と苦悩する。

窓越しに10分

「お母さん、いつもの持ってきたよ」。5月15日、

母は娘の顔をじっと見つめ、何度もうなずく。10分はあっという間だ。「早く元の日々に戻ってほしい」。自室に戻る母を見送りながら高橋さんは折った。